

Title	<書評> ルイ・デュモン『個人主義論考-近代イデオロギーについての人類学的展望』（渡辺公三・浅野房一訳、言叢社、1993年、原著初出1983年）
Author(s)	小坂, 亜矢子
Citation	年報人間科学. 2004, 25, p. 249-252
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/5765
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

ルイ・デュモン『個人主義論考—近代
イデオロギーについての人類学的展望』

(渡辺公三・浅野房一訳、言叢社、1993年、原著初出1983年)

Louis Dumont, *Essais sur l'individualisme : Une perspective anthropologique sur l'idéologie moderne.*

(Translated by Kozo Watanabe and Fusakazu Asano, Gensosha, 1993.

Originally published 1983.)

小坂 亜矢子

この本は、ルイ・デュモンが二〇年にわたって行ってきた近代イデオロギー研究をまとめたものである。全9章のうち、第1章から第3章までは、近代イデオロギーの生成を、初期キリスト教まで遡り語りおこしている。第4章から第6章は、近代イデオロギーのドイッ的な形を、フランスとの比較などを通して明らかにし、そこから展開して、近代の病としての全体主義を考察している。ここまですべての本書の第1部である。第2部の第7章から第9章は、第1部で述べたような近代イデオロギー研究に人類学者が携わることの根拠を跡づけている。

第1部の前半は、近代イデオロギーの特徴とされる個人主義が歴史的にたどられる。本書ではキリスト教を個人主義の源とする見解がとられている。デュモンが宗教を重視する根拠については、「宗教は社会全体に働きかけ、人間の行動に直接関係する(デュモン…*etc*)」からと述べられるにとどまり曖昧におもわれた。しかしながら、ヨーロッパにおける神権と王権の対立が個人主義を生み出したという論旨の展開は説得的である。

個人主義は国家の拒絶であり、国家に抗することによって成立すると考えられる。マルク・オジェがフィールドとするアフリカの社会を西欧社会と区別して「国家なき全体主義」の社会と形容したのは、西欧的な文脈において全体主義が国家なしではありえないからである。全体主義の対義語である個人主義もまた、国家なしには考えられない。国家による支配に抗するために用いた教会のイデオロギーが、個人主義の発展を促したというデュモンの見解は、国家に

抗する個人主義の生成過程として充分納得できるものである。

第1部後半では、近代イデオロギーが、ドイツの文脈から取り出される。ヘルダーやフィヒテ、トレルチの思想に個人主義がどのよう埋め込まれているか、つぶさに検討される。続いて、ドイツにおける全体主義の解明が試みられる。ヒトラーの個人主義が全体主義の病巣とされる。

第2部は、近代イデオロギー研究と人類学研究との結びつきを説明する部分である。デュモンが近代イデオロギー研究の重要性に気付いたのは、インドのヒエラルキー概念の説明がたさにぶつかったときである。近代的な分析では理解できないものを「非合理」や「迷信」のカテゴリーに放り込んでしまう。しかしデュモンは、「非合理」や「迷信」的な行為を理解できないのは、理解できない側、近代人類学の方に問題があると考えた。個人主義に絡めとられた分析概念では、ヒエラルキーを明確にすることができない。そこから、デュモンの近代を相対化する試みははじまる。

デュモンは人類学を「生成しつつある科学」と呼び、人類学の務めを次のようにいった。

「わたしたちが手にしている概念・道具は真の社会人類学の要請に答えるものにはなっていない。わたしたちのもつ概念を少しずつ、必要ならばひとつずつ、より適切な概念に代えてゆくことにこそ進歩があるのである。すなわち当初はデータを歪めざるをえなかった概念を歪みなしにデータをとりこむことのできるより適切な概念

に、近代の中で生まれたという由来から解放された概念に、代えるのである。(デュモン：171)」

デュモンのいうように、いまだ抽象レベルの低い理論しか持ち得ていない人類学が、理論の抽象レベルを上げるには、近代的な概念からはみだしたデータを常に必要とする。人類学はこうした非近代的データを飲み込み咀嚼していくことによって前進してきた。

近代が非近代に出会う場にしか人類学の務めがありえないのであれば、非近代社会の者が近代社会を人類学的に研究するという状況はありえないことになる。本書でデュモンは、例えば非近代社会の者が近代社会を人類学的に研究することも可能だと考え、「異なった文化の数だけ人類学がある」と認識することを「夢想」といつて斥けている(デュモン：299-307)。それでは、近代社会であることが自明視されている社会、例えばフランスで、人類学的フィールドワークを行おうとするのは「夢想」なのであるか。フィールドでの例をあげたい。

フランスでは多くの人々がバカンス期に旅行に出掛ける。ある夏のバカンスのとき、私はフランスの大都市近郊のC村に住むある家族を訪ねた。その家族の主婦はバカンスにどこに行こうかと散々悩んでいた。C村の彼女の家は、交通量の多い大きな道からは遠く離れて静かな集落にある。庭には草木が生い茂り、プールもある。子供は庭にテントを張ってそこで寝泊りしたりして遊んでいる。家族全員、自宅で充分に楽しんで過ごしているようにみえた。そこで私

は彼女に「バカンスは家でゆっくりすれば？」といった。すると彼女は即座に「バカンスにどこにも行かなかったなんていえないじゃない」と答えた。

個人主義がフランスの遇々にいきわたっているのであれば、彼女の返答はありえないはずだ。彼女がどう感じるかだけが重要ではなく、彼女とその他の人々との関係つまり社会は二次的な重要性しかもたないはずである。彼女の返答は例えば「せっかくの休みなので旅行したい」というようなものであるべきだった。

身分制の崩壊したあと、近代化のすすむフランスでは人々はむしろますます周囲との差異に敏感になったと竹沢はいう(竹沢・1997)。生まれながらの差異以外のもの、衣服、教養、インテリア、絵画などといった外部的な操作で他から自己を区別するようになり、人々は社会の中の自己の位置を常に問わずにはいられなくなったというのだ。このような行為は、個人主義イデオロギーに反する行為である。近代社会とされるフランスにも近代イデオロギーと共に、非近代的要素が広く行き渡っているのだ。

近代と非近代が併存する状況については、インドを例にとってチャクラバティが述べている。それはインドのような非近代社会とされる社会のみの現象ではなく、近代社会にも当てはまる。フランス同様、近代社会とされているアメリカ合衆国にも、近代的とはいえない現象が数多くあることを酒井直樹が指摘している。中絶反対運動などのカトリシズムに基づく行動などがある(Sakai: 625)。近代社会と目されている社会にも、近代と非近代が共時的に併存し

ている。

デュモンも近代社会が非近代的要素を多く抱えていることはわかってきた。それではデュモンが「夢想」といつて斥けたのはなんだったのか。それは、非近代社会の者が近代社会を人類学的に研究するという発想ではなく、非近代的思考の枠組で近代を描こうとすることである。人類学は近代の概念で非近代を理解する試みであり、その逆ではない。

チャクラバティは、近代的な概念に普遍性がないことを繰り返して述べ、近代的概念が非近代を理解するのにいかに不可欠であり、同時に不適切であるかを具体的に浮き彫りにし、インドで、近代と非近代が服を着替えるように無理なく併存する状況を、近代の概念道具を用いて描き出そうとした。デュモンの試みをチャクラバティのそれと対照させるならば、デュモンは、個人主義イデオロギーを特徴とする近代的概念の普遍性のなさを、まず第一に明確にしなければならぬと考えた。そのためには近代を測定しなければならぬ。人類学が非近代社会を理解できるようになるためには、まず近代を知らなければならぬ。本書の第2部でデュモンが述べたのは、近代と非近代がいかに違っているか、どう違っているのかを知ることが人類学にとっていかに重要かということである。

本書をデュモンの思考の時間軸で並べるならば、第2部は第1部より前にくるはずである。近代を知ることの重要性に気付いたデュモンは、「近代の特徴をなすものを分離して取り出そう」と試みた(デュモン・35)のだ。本書の第1部に当たるこの試みの結果、デュ

モンは「受け入れざるを得ない重い事実」に突き当たる。それは、「現代世界においては、そのもともと「近代的な」「進んだ」「開発された」部分にさえ、そして理念と価値の平面、イデオロギーの平面に限ってみても、他と区別して近代的なものと定義したものの以外の何かが存在するという事実（デュモン：36）」

である。

近代の特異性を取り出す試みを推し進めた結果、近代は非近代の渦の中にのみこまれてしまう。デュモンは近代を近代的に相対化することはできなかった。結果として、近代を非近代から分離することはできないからである。デュモンの試みは不可能であることが証明されて終わった。だが、近代を相対化しようと試みることは、ポストモダンを考える上で必要なプロセスであったといえるだろう。近代は非近代と分かちがたくむすびついているのだ。

参考文献

- オジェ、マルク 一九九五『国家なき全体主義―権力とイデオロギーの基礎理論』竹沢尚一郎訳、勁草書房。
- 竹沢尚一郎 二〇〇一『表象の植民地帝国―近代フランスと人文諸科学―』世界思想社。
- Chakrabarty, Dipesh. 2000 *Provincializing Europe: Postcolonial Thought and Historical Difference*. Princeton University Press.
- Sakai, Naoki. 1999 "Naoki Sakai's comment, in Harry Harootunian